



舞姫

鷗外森林太郎著

中古

石炭をば早や積み果てつ中等室の卓のほりもいと閑
 かよて熾熱燈の晴れはきもやくなし今宵も毎
 ること集ひ来る骨牌仲間もホテルに宿りて舟に残り
 しち余一人のみなれど

五年前の事なりしが平生の望み足りて洋行の公命を蒙
 りりこのセイゴンの港まで來し頃も目もみも耳も
 聞くもの一として新しきもの多き筆を任せて書き記
 したる紀行多日ほど幾言もやちけん當時の新聞に
 載せられて世の人にもてはやされしが今日になりて
 思へば穉なき志操身の程知らぬ放言さらぬも世の常の

目次 ● 巻頭コラム「千住―森家と町の暮らし―」多田文夫(足立区立郷土博物館学芸員) /
 展示会場から / 地域情報 / 次回展示のお知らせ コレクション展「舞姫―恋する近代小説」 /
 論考「『森鷗外自筆「舞姫草案」(学校法人跡見学園所蔵)の意義」山崎一穎(跡見学園理事・森鷗外記
 念会顧問) / 展示報告 / 活動報告 / ショップ便り / カフェ便り / 編集後記 / これからの催しもの

千住——森家と町の暮らし——

文人文化を受容した町がある。江戸東京から北へ向かう奥州街道最初の宿場、千住の町は色濃く「琴棋詩書画」と総称される文化を暮らしの中に受容していた。早く江戸中期の本草学者だった田村藍水(一七一八〜一七六六)が千住宿の別荘で宝暦二(一七五二)年に「東都嘉慶宴」という中国文人文化を主題とした雅宴を開いたことから、美術と教養の系譜がはじまる。文化七・八(一八一〇・一一)年頃、小林一茶は江戸三大家の一人に数えられた文人絵師、千住閑屋の建部果兆の庵をたびたび訪れ句会に臨んでいる。文化十二(一八一五)年には江戸琳派の酒井抱一、関東文人の総帥・谷文晁、戯作者の大田南畝らが千住に集い、酒合戦が催され、その後の江戸琳派や谷文晁一門にも影響を与えている。

この地では、そうした文化と教養を愉しむ風土が根付き、明治を迎えてもその豊穣さに満ちていた。明治一〇年代〜二〇年代に絞ってみても、江戸琳派の絵師、村越向栄(一八四〇〜一九一四)や中野其豊が、千住に居を構えて画業をなしており、漢学者で医師の佐藤元長(一八一八〜一九七七)も暮らし、静男が明治十二(一八七九)年に家を構えた。先の向栄や其豊、元長たちの住居は、千住一丁目にあった静男の家から、半径五〇〇m程の円内、歩いても一〇分程度の距離である。南北に二・五kmもある千住の中でも、とくに近所に位置したといっ

て良いだろう。屋敷自体は新築ではなく旧家・岡田紋次郎家を静男が入手したものである。鷗外は、旧家を引き継いだ千住の家について「カズイヌチカ」(明治四四年・一九一二年発表)の中で次のように描写している。「火事にも逢わずに、大ぶ久しく立っている家と見えて、頗る古びが附いていた。柱なんぞは黒檀のように光っていた。硝子の器を載せた春慶塗の卓や、白いシイツを擁うた診察用の寝台が、この柱と異様なコントラストをなしていた。」

森家の移住当時、鷗外自身は、医学生で下宿先に住んでいたため、千住の家は「実家」であった。このころから鷗外は佐藤元長に漢詩を学んでいる。元長は会津若松藩出身の旧幕府医師で、幕末期には千住の名士層と交流し、維新後、千住に居を構えていた。静男宅から三〇〇mほどのところに元長の家はあったらしい。元長一家は森家と親しくあつて元長の嗣子、斎藤勝寿が用いていた号、鷗外漁史を用いたのが鷗外号の由来となったことも、森家と佐藤家の交流の深さを物語っている。

さて鷗外は明治十四(一八八二)年、一九歳の時、東京大学医学部を卒業して本郷の下宿から千住に転居し、以後、ドイツ留学までの四年間を過ごす。同年には医師としての開業免許を千住の住所で取得し臨床医として活動した。医師らしい唯一の臨床経験だったと「カズイヌチカ」(同前)の中で医師「花房」として登場し、次のように述べている。「花房の記憶には、いつまでも千住の家で、父の代診をした時

のことが残っている。それが医学をした花房の医者らしい生活をした短い期間であった。」

発表当時四九歳の鷗外にとつて三〇年前の記憶である。父、静男を一〇年前に亡くしており、父で診療したことが大切な思い出となつていいたと思ふ。

この時期の普段の暮らしぶりを小金井喜美子の『鷗外の思い出』(昭和三十一年・一九五六年)から拾うと、江戸文人の生活文化―琴棋詩書画をたしなむこと―が色濃く見いだされる。小梅時代から千住時代、鷗外自身も筆をとり、喜美子に離(紙離図であろうか)を描いて与えたほか、文人画の代表的な画題である四君子(蘭、竹、菊、梅)を描いていたという。漢詩を元長に学び、絵も描く、二〇歳前後の鷗外が実家で過ごした日常は文人文化を明解に物語る。同時期、千住の町も豊かな文人文化の盛りを迎えていた、文晁門人の江戸絵画があり、明治の琳派絵師が画業をなす生活文化のピークの一つであった。

その後、鷗外は陸軍に出仕し明治一七(一八八四)〜一八(八八)年、ドイツへ留学していく。帰国後、千住の実家に戻つたが、翌年には結婚して千住を離れる。実家も明治二五(一九一二年)に団子坂に移つていった。

多田文夫 (足立区立郷土博物館学芸員)

「隣に石井柏亭氏、千ヶ崎第六氏がいられたので、『冬柏』の歌会のあつた頃を思い出しました。」

洋画家・版画家であつた石井柏亭と、雑誌『冬柏』の編集者、千ヶ崎第六が列席している描写である。周知のごとく柏亭は谷文晁門人の文人絵師・鈴木鶯湖(一八一六〜一七七〇)の孫で千住を画題とした作品も知られる。第六は足立の名士層出身の編集者であり洋画家・歌人であつた。二人とも千住・足立に関わりが深く、江戸の文人文化を基底に持つ人々であつた(展覧会



足立区立郷土博物館蔵 足立区立郷土博物館所蔵 六曲一双 足立区立郷土博物館蔵 紙本着色銀地押絵貼 十二月花弁図屏風 村越向栄筆 明治期に活躍した琳派絵師の作でありつつ生活用具であつた。千住では日常の暮らしに文人文化が生きていた。

「与謝野晶子と詩人千ヶ崎第六を来年三月に足立区立郷土博物館で開催予定。柏亭と第六の列席を得た「沙羅の木」碑を見ると、そうした若き日の鷗外をめぐる文人文化の受容から再生を連想する。

ところで、千住に伝来した屏風には銀箔地の作品が多い。参考に掲げた十二月月屏風もその一つである。鷗外が描写した白いシイツと黒い柱の対象と同じく、地元伝来した文人絵師の画業は、黒が基調の家の調度に相応しい、浮き出るような、清雅なイメージを運んでくれる。とくに、この屏風の右隻、一扇目の梅園を見ながら二〇歳頃の鷗外の四君子図や紙離図を想像する。本稿を書きながら、鷗外の画に、地域性のほかに、文人文化の連続性を鑑賞したくなつてきた。

展示会場から

夏目漱石と森鷗外——交差する二人——

夏目漱石(本名・夏目金之助)は慶応三(一八六七)年一月五日(新暦一月九日)、江戸牛込馬場下横町(現・新宿区喜久井町)に、当地の名主であつた夏目小兵衛直克と千枝の五男として生まれた。明治元(一八六八)年、一歳の時より、内藤新宿の名主、塩原昌之助の養子となり、翌年、養父に伴い浅草三間町に移り、その地の小学校に通いながら、明治九(一八七六)年九歳の時まで浅草に住んだ(この頃の作品『道草』の中で回想されている)。

ところで漱石が浅草に住んでいた頃、隅田川を隔て浅草の対岸にあたる向島(現・墨田区向島)に津和野から上京したばかりの鷗外の家族が暮らしていた(明治五(一八七二)年から明治十二(一八七九)年まで)。こうしたことは、まったく偶然ではあるが、この後も漱石と鷗外は近接した地に互いの住居を持つことになる。例えば、漱石は明治二九年から三三年まで熊本に住んでいたが、同じ時期に、鷗外も小倉に住んでいた(明治三三年夏から明治三五年の春まで)。

中でも、よく知られているのは、(東京市本郷区千駄木町五七番地)の家である。まず、鷗外が明治三三(一九〇)年から、明治二五年にかけてこの家に住んだ。その後、鷗外はそこから程近い千駄木の団子坂上に住居を定めるが、鷗外が千駄木町五七番地の家を去つておよそ十年を経て明治三六(一九〇三)年三月、英国留学から帰ってきた漱石がこの家に住むことになる。漱石は第一高等学校講師、ラフカディオ・ハーンの後任として東京帝国大学英文科講師を務める傍ら、『吾輩は猫である』『坊つちゃん』『草枕』『二百十日』などの初期の代表作をこの家で創作する。この後、漱石は本郷区西片町(現・文京区西片町)に移り、やがて終焉の地の早稲田へと移るのであるが、千駄木、西片といずれもさほど遠くない所に住みながらも、互いに親しい往き来はなかつた。ただ、刊行した書物を送り合つたことは、札状や送り状が残っていることから分かる。

大正五(一九一六)年十二月九日、漱石は五十歳で死去する。十二月十二日、青山斎場で行われた葬儀に鷗外は参列しているが、その年は、五四歳の鷗外が軍医として長く勤めた陸軍を去つた年でもあつた。そして漱石の死後およそ六年を生き、大正十一(一九二二)年七月九日、六十歳、団子坂上の家で亡くなった。

倉本幸弘(森鷗外記念会常任理事)

夏目漱石筆鷗外宛葉書

大正元年十月七日付 [505341]



本郷駒込千駄木町二十一
森林太郎様
牛込早稲田南町七
夏目金之助

啓

「我」幕物難有拝受
御礼申上候。拙著「彼岸過迄」
迄出版につき小包にて差出候御啓
手願上候頓首
十月七日



『彼岸過迄』

大正元年九月
春陽堂
見返しに漱石の署名がある。

地域情報

文京花の五大まつり

文京区では、花をテーマにした「文京花の五大まつり」が毎年開催されています。開花に合わせて開催時期が異なるため、さまざまな花まつりを1年を通して楽しむことができます。過去の館報でも梅まつり(9号掲載)やつつじまつり(14号掲載)を取り上げましたが、また次の花の季節を迎えています。

6月11日(土)〜19日(日)、白山神社では文京あじさいまつりが開催されます。境内から隣接する白山公園にかけて植えられた、約3千株の多様なあじさいを堪能することができます。期間中には、歯痛止め信仰で知られる白山神社ならではの歯ブラシ供養ほか、さまざまなイベントが行われます。



あじさいまつり

また、11月1日(火)〜23日(水・祝)は、湯島天満宮で文京菊まつりが開催されます。明治時代には団子坂で盛んに興行されていた菊人形、懸崖菊や千輪咲など普段では見られない仕立ての菊の花が展示されます。記念館から少し足を延ばして、お出かけください。



菊まつり
[画像提供: 文京区観光協会]

展示のお知らせ

コレクション展

舞姫——恋する近代小説

パート1 「告白」する青年たち
パート2 二人を引き裂くもの

『新著百種』1号、5号、12号 明治22～24年

会期 ●2016年

7月1日(金)～9月25日(日)

パート1: 7月1日(金)～8月8日(月)
パート2: 8月10日(水)～9月25日(日)

※会期中の休館日: 7月26日(火)・8月9日(火)

会場 ●文京区立森鷗外記念館 展示室2

開館時間 ●10時～18時(最終入館は17時30分)

※毎週金曜日は20時まで開館
(最終入館は19時30分)

観覧料 ●一般300円(20名以上の団体: 240円)
※中学生以下無料(障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料) ※各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

「舞姫草葉をめぐって」

講師 山崎一穎氏

(跡見学園理事長、森鷗外記念館顧問)

日時 8月7日(日) 14時～15時30分

会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室

定員 50名(事前申込制)

料金 無料

申込締切 7月22日(金)必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

7月13日、27日、8月17日、31日、9月14日

いずれも水曜日14時～(30分程度)

申込不要(展示観覧券が必要で)

同時開催

文の京ゆかりの文化人顕彰事業関連

森鷗外記念館ミニ企画

「夏目漱石

「うつくしい本」への探求

漱石のこだわりが投影された美しい装丁の本、そして鷗外と漱石—二人の文豪の間わりについて紹介します。

※コレクション展開催中のコーナー展示です。通常展覧券でコレクション展ともにご覧いただけます。

鷗外忌のお知らせ

7月9日は鷗外の命日(鷗外忌)です。

当館では毎年7月に一カ月限定で、鷗外の遺言書のオリジナルを展示します。

鷗外忌当日に展覧会を観覧された方には、遺言の一節が書かれた特製しおりをプレゼントします。



小杉天外
『嵐風恋風』後編
明治37年春陽堂

夏目漱石『虞美人草』
大正元年春陽堂

二葉亭四迷『浮雲』第三編挿絵(月岡芳年画)
『都の花』4巻18号 明治22年



自筆草稿『舞姫』明治22年 学校法人跡見学園所蔵

論考 「森鷗外自筆／舞姫草葉」(学校法人跡見学園所蔵)の意義

山崎一穎 (跡見学園理事長、森鷗外記念館顧問)

(上) 原稿の流通経路

松山荘「古書肆「したよし」の記」(二〇〇三年三月三日、平凡社)を参照しながら、鷗外自筆の『舞姫』の原稿の流れを記す。

大正十年(一九二二)前後、下谷区御徒町の古書店・吉田書店(通称したよし)の店主吉田吉五郎は、廃品回収業者の立場(問屋)廻りの功刀亀内から『舞姫』の原稿を購入した。

吉田は仮綴じ原稿を半分に折り、中に台紙(美濃半紙)を入れて袋綴じにした。台紙は原稿の縦の寸法より上、下若干長い。全二十八丁を和装本に仕立て、題簽を付けて「森鷗外自筆 舞姫草葉」と墨書した。売価を五百円とした。

永井荷風は「断腸亭日乗」の昭和二年(一九二七)十一月廿五日の条に「暗れて風静なり、午後十年以来の故紙を取りまじめ庭に持出で落葉と共に一炬に付す、近年文士原稿の古きものを蒐集すること流行し、御徒町の古書肆吉田屋の店などにては屑屋より買取りし原稿を見事に縦直しなす、されば反古紙もうかとは屑屋の手には渡されぬなり」と記している。反故原稿を焼いている荷風の反骨ぶりが窺われる。

昭和八年(一九三三)夏、本郷の井上書店主から「したよし」の『舞姫』の原稿のこを聞いた古書店主反町茂雄(弘文社)が「したよし」を訪ねた。「したよし」は吉五郎から息子の糸二

に代替わりをしていた。反町は三百円で『舞姫』の原稿を購入した。

反町は九月下旬「大阪朝日新聞」社主上野精一に三百五十円で売却した。上野社主は購入にあたって、鷗外の長子森於菟の箱書きを条件とした。反町は『舞姫』の装丁を直し、帙を付け、柙目の桐箱を作成した。森於菟は蓋の表に「森鷗外自筆／舞姫草葉」、裏に昭和八年十二月二十一日／森於菟」と墨書した。反町は桐箱に『舞姫』を収め、さらに外箱を作り、表に「森鷗外草葉」と墨書し、上野精一に渡した。

上野は『舞姫』二丁表の右上に「上野／蔵書」と角印(朱)を押印した。反町の作成した帙の題簽の下にも蔵書印を押した。原稿は上野家から出ることにはなかつた。上野精一は京都の便利堂からコロタイプ版で複製本(三〇〇部)を作り(昭和三十一年(一九六〇)十二月十日)、知友に配布した。のち、追加一七〇部(発行年月日原稿と同じ)を作成した。

日本近代文学館編『複製近代文学手稿一〇〇選』(一九九四年十一月二十一日)、二玄社の一葉として『舞姫』の一丁表裏が一枚の原稿(蔵書印朱印)として複製された。

この頃であろうか、今から二十年ほど前、原稿は上野家から臨川書店へ渡った。その後、鷗外ゆかりの地や施設などに、何度か購入の打診があったと仄聞している。

平成二十七年(二〇一五)三月初旬「国際稀覯本フェア二〇一五」(於ホテルグランドパレス)に出品され、学校法人跡見学園が購入した。これで『舞姫』の原稿の売買はなくなった。

(下) 原稿の学術的価値

自筆原稿は書き手の心の動きが如実に現れる。特に毛筆は墨の濃淡、文字と文字の連続・不連続、楷書・行書体等書き手のその折々の心理状況が窺われ興味深い。

「森鷗外自筆 舞姫草葉」とあるが、原稿の下書きではない。なぜならば、鷗外が段落の区切りの意味で※印(縦に四つ)を付けた所に、別筆で「三行明中央へ七号二テ置ク」と記してある。別筆で※印の位置、活字の大きさを指定したのは、編集者である。さらに原稿上部、下部に前川渡邊、堤等の押印、記名がある。これは原稿から活字を拾った文選工の署名であ



森鷗外自筆草葉『舞姫』 学校法人跡見学園所蔵

逆にモデルの存在を作品中に残している。父の職業を「仕立物師」とする。今日では母の職業であり、母の故郷「ステツチン」という地名は、エリーゼの出生の地である。エリスの家の様子の細部の描写を簡略化する。実景から離れようとする。鷗外の執筆時の微妙な心の動きが興味深い。モデル、エリーゼの実像を明らかにした六草いちか氏の功績は大きい。

鷗外は「国民之友」に掲載された本文を、数度改訂する。原稿は『舞姫』の初形であり、しかも推敲の様子が分るだけ学術的価値が高い。

※本稿掲載の資料名は、森於菟墨書の表記に従った。

展示報告

特別展 私がわたしであること

—森家の女性たち 喜美子、志げ、茉莉、杏奴—

会期：2016年4月9日(土)～6月26日(日)

本年は、鷗外の妻・森志げ没後80年、妹・小金井喜美子没後60年にあたります。当館ではこれを契機とし、長女・森茉莉、次女・小堀杏奴を加えた、4人の女性にスポットをあて、展覧会「私がわたしであること」森家の女性たち」を開催しました。

彼女たちは当初、鷗外の家族として世間の注目を集めてきましたが、翻訳家や小説家



第1展示室では4人の文筆活動を紹介します。

随筆家としても数々の作品を遺した存在です。展覧会はそのそれぞれの文筆活動と、好きなものとの二部で構成しました。書簡や原稿、愛用品などの資料を展覧し、彼女たちの「私らしさ」に迫りました。

喜美子が、鷗外から翻訳を勧められた『ゆく春』の自筆原稿や、子育てに追われ文筆が十分にできないことを鷗外に相談した書簡からは、喜美子がいかに兄・鷗外を頼りにしていたのかがうかがえます。また、和歌の指導を仰いでいた与謝野寛・晶子との書簡や、亡くなった直後に刊行された単行本『鷗外の思ひ出』など、喜美子の遺したものは、文芸への強い希求が感じられました。

鷗外の勧めで執筆を始めた志げは、3年の活動期間にも関わらず20以上の作品を残しています。志げが明治43年に刊行した単行本『あだ花』の見返しには、和紙舗「榛原の千代紙」が使用されています。また、観劇した演劇の絵はがきや、よく使用した清涼剤など、志げの好んだものには女性らしい美意識が見受けられました。

茉莉は文壇デビューこそ遅かったものの、現在でもよく知られている作家の一人です。茉莉特有の話題豊富な随筆や、甘美な世界観を表現した小説は、自身が住む部屋に置かれたたぐさんのお気に入りの物たちから着想を得て書かれました。好きなものを紹介するコーナーでは、展示スペースを愛用品で埋め尽くし、茉莉の部屋をイメージしました。

活動報告

4月24日(日)、文学座の演出家・稲葉賀恵氏と早稲田大学教授・金井景子氏を迎えて、対談「鷗外とイブセン」女性をキーワードに」を開催しました。稲葉氏が演出を手



日時：4月24日(日) 14:00～15:30
講師：稲葉賀恵氏(文学座)×金井景子氏(早稲田大学教授)

掛けたイブセンの『野鴨』を切り口に、登場人物を通して現代にも通じるイブセン作品の魅力や、鷗外とイブセンの繋がりについてお話いただきました。

また5月15日(日)には、横浜ポルトシアターのメンバーによる、遠藤啄郎氏演出・語り「樋口一葉」に「こりえ」を開催しました。松本利洋氏の奏でるエレキギターの音色を背景に、吉岡紗矢氏が場面や人物に合わせて声色と表情を変え、力強く語りました。



日時：5月15日(日) 14:00～16:00
横浜ポルトシアター

講師や出演者たちが生き生きと表現する姿は、特別展「私がわたしであること」森家の女性たち 喜美子、志げ、茉莉、杏奴」の4人と重なって、展示とともに元気がもたれるイベントとなりました。



ショップ便り

鷗外の手紙やノートに描かれたドロイングや文字を、表紙にあしらった一筆箋ができました。

表紙は全部で4種類。クリアファイルやポストカードなどで、すでに商品化されているみみずくやゲンゲをはじめ、娘・杏奴宛の葉書に描かれた鹿の絵や、医学生時代のノートに描かれた図の一部など、これまでになかったモチーフが新しく加わり、遊び心あるラインナップです。鷗外の描いたイラストはどれも味わいがあり、1つに絞るのは難しいですが、お手に取ってぜひお気に入りを探してみてください。

中は方眼タイプと罫線タイプの2種類。シンプルで場面を選ばず使える一筆箋なので、種類選びに迷ったらまとめ買いもおススメです。



パリ留学中から執筆を始めた杏奴は、生涯にわたって鷗外や志げ、その他家族のことを書き続けました。画家である小堀四郎と結婚してからも、新しい家族との絆を深め、助け合う日々を過ごします。明晰な視点で書かれた随筆は、四郎や子どもたちが装幀を手掛け、何冊も単行本化されました。展覧会を通して、4人の女性たちが、明治大正、昭和という時代の中で「私」として生きながら、それぞれの言葉で自身を発信していく力強い姿勢を示すことができました。そんな彼女たちを象徴するかのような、花のメインビジュアルが会場を彩り、来館者の皆様にも華やかな展示室を楽しんでいただけようです。

最後にありがとうございました。本展を開催するにあたり、ご協力賜りました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



[右] 4人の文筆活動を象徴する資料。喜美子の自筆原稿「ゆく春」や、茉莉の「甘い蜜の部屋」などを展示。[左上] 第2展示室では4人の好きなものを紹介します。[左下] 4人の好きなものを象徴する資料。志げの好んだ清涼剤「清心丹」や、杏奴が家族で手掛けた書籍を展示。



カフェ便り

4月から毎週金・土・日曜日限定で、軽食「モリキネプレート」を始めました。浜町にある「ドイツパンの店タンネ」のブレツェルと、千駄木にある「コジツカハム」のコンビーフやセミドライソーセージをメインに、ピクルス、ヨーグルトを添えたワンプレートです。

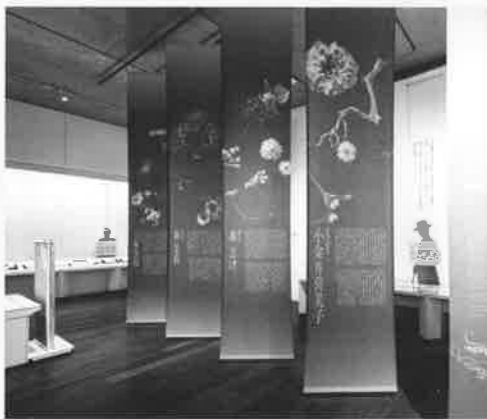
鷗外が留学していたドイツでお馴染みのブレツェルと、千駄木にある人気店のコンビーフとをいっしょに楽しめるのは、モリキネプレートならではです。

展示室に行く前に遅めの朝食を、もしくは、展示観覧後の小腹を満たしに、モリキネカフェにお立ち寄りください。

さらに7月23日(土)には、「コーヒーのある風景」をきっかけに、場と人とを繋ぐアーティストユニットLPACKが、鷗外や記念館をイメージしたオリジナルのコーヒーを提供してくれます。同日閉店後、LPACKによるトークショー(8頁参照)もありますので併せてご参加ください。



○モリキネプレート500円。各日10食限定。ドリンクを一緒に注文いただくドリンクを2割引でご利用いただけます。



花をモチーフとした装飾。写真：佐藤基

〈展覧会期間中に関連事業を開催しました〉

講演会「森茉莉の美の世界」

日時 5月22日(日) 14時～15時30分
講師 太田治子氏(作家)

作家・太田治子氏をお迎えし、ご自身や茉莉にまつわるエピソードとともに、『贅沢貧乏』『甘い蜜の部屋』などに見られる茉莉文学の魅力についてお話いただきました。

スペシャルトーク&上映会

「小堀家の風景」小堀杏奴・四郎を知る」

日時 6月4日(土) 14時～16時15分
講師 伊勢真一氏

(下キュメンタリー映画監督)
金井景子氏(早稲田大学教授)

小堀四郎と杏奴の空間を記録した、ドキュメンタリー映画「信・望・愛」孤高の洋画家小堀四郎90才の肖像」の上映を行いました。また、その監督である伊勢真一氏と、展覧会監修者である金井景子氏の対談を行いました。

編集後記

鷗外と親交の深かった、洋画家・原田直次郎の業績と生涯を紹介する展覧会「原田直次郎展」が、現在岡山県立美術館で開催されています。今年2月より、埼玉県立近代美術館(2月11日～3月27日)、神奈川県立近代美術館葉山(4月8日～5月15日)、岡山県立美術館(5月27日～7月10日)、鳥根県立石見美術館(7月23日～9月5日)の順に巡回されており、当館からも一部資料を貸し出しています。

留学先のミュンヘンで出会った鷗外と原田は、他の留学生と一緒に郊外へ外出するなど親しく付き合い、ともに青春を謳歌しました。帰国後も交友は続き、ドイツ三部作として知られる『舞姫』『文づかひ』の挿絵や、『めさまし草』の表紙などを、原田が手掛けました。明治32年に36歳の若さで逝去した原田を偲び、鷗外は10年後の明治42年に東京美術学校(現・東京藝術大学)で一日限りの回顧展を主催します。当館では、平成25年に原田直次郎生誕150年を記念して特別展「鷗外と原田直次郎」文学と美術の交響」を開催しました。現在開催中の展覧会とともに、いづれも鷗外が開催した回顧展の想いを継ぐものです。

「鷗外と原田直次郎」文学と美術の交響」を含め当館発行の展覧会図録は、完売の場合を除き、当館1階ショップにて購入が可能です。原田直次郎に関心を持たれた方は、是非この機会にお手に取ってみてください。

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。
詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせ下さい。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★有料のプログラム参加者はイベント当日にかぎり、展覧会観覧料が免除となります。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

7月9日(土) 10:00~17:30

鷗外忌記念行事 ◎

鷗外の命日(7月9日)に展覧会を鑑賞された方にオリジナルのしおりをプレゼントします。

7月17日(日) 14:00 ~ 15:30

鷗外忌記念対談「森茉莉という自由」

講師：小島千加子氏(文芸評論家)×島内裕子氏(放送大学教養学部教授)
会場：講座室 料金：800円 定員：50名 申込締切：7月1日(金)

7月23日(土) 18:00 ~ 19:00

新・観潮楼歌会 トークショー「コーヒーのある風景」

講師：LPACK.(アーティストユニット) 会場：モリキネカフェ
料金：800円(お茶付) 定員：15名 申込締切：7月8日(金)
アーティストユニットLPACKが自身の活動について、文化施設のカフェの役割や可能性についてゲストの草薙洋平氏(東京ビストル)と語ります。

8月22日(月)~9月25日(日) 10:00~18:00
(9月16日以外の金曜日は20:00まで)

新・観潮楼歌会 松田敏美写真展「Between the Light's 鷗外ゆかりのベルリン」◎

会場：モリキネカフェ

9月16日(金) 19:00 ~ 20:00

新・観潮楼歌会 トークショー「Between the Light's 鷗外ゆかりのベルリン」

講師：松田敏美氏(写真家)×倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)
会場：モリキネカフェ 料金：500円(お茶付) 定員：15名 申込締切：9月1日(木)

7月30日(土) 14:00 ~ 16:30

文の京ワークショップ「ひかりのえ・カメラのない写真」親子プログラム

講師：佐野陽一氏(美術家) 会場：講座室 定員：5組
料金：大人 800円/中学生以下 500円 申込締切：7月15日(金)
被写体を直接モノクロ印画紙に焼き付ける技法(フォトグラム)でカメラを使わずに暗室の中で写真作品をつくるワークショップです。

8月6日(土) 14:00 ~ 16:00

文の京ワークショップ「〈パパ〉の手紙をまねる」親子向け推奨

講師：華雪氏(書家) 会場：講座室 定員：15名
料金：大人 800円/中学生以下 500円 申込締切：7月22日(金)

8月7日(日) 14:00 ~ 15:30

展示関連講演会「舞姫草彙をめぐって」

講師：山崎一穎氏(跡見学園理事長・森鷗外記念会顧問)
会場：講座室 定員：50名 料金：無料 申込締切：7月22日(金)

9月3日(土) 11:00 ~ 12:30

鷗外講座 応用編「鷗外と同時代の美術 1」

講師：増野恵子氏(早稲田大学・跡見学園女子大学非常勤講師)
会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：8月19日(金)

9月10日(土) 11:00 ~ 12:30

鷗外講座 応用編「鷗外と同時代の美術 2」

講師：増野恵子氏(早稲田大学・跡見学園女子大学非常勤講師)
会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：8月26日(金)

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]

水月ホテル鷗外荘 × 文京区立森鷗外記念館 連携特別企画!

「鷗外と『舞姫』の世界」 9月9日(金) 12:00~15:00

鷗外ゆかりの地である水月ホテル鷗外荘と連携して『舞姫』を堪能する特別企画を開催! 加賀乙彦氏による「舞姫の間」での講演のほか、同ホテルでの食事を実施します。

講師 加賀乙彦氏(作家、文京区立森鷗外記念館名誉館長)
会場 水月ホテル鷗外荘(東京都台東区池之端3-3-21)
料金 7,000円(食事代含) 定員 40名

【申込方法】

以下のいずれかの方法で当館までお申し込みください。

- ①Eメール(bmk-event@moriogai-kinenkan.jp)
 - ②往復はがき ③来館受付
- 氏名(ふりがな)・住所・電話番号をお知らせください。
申込締切：8月12日(金)

※先着順のため定員になり次第、募集を締切ります。
※1通につき2名様まで申込み可能です。



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00 ~ 18:00 (最終入館は17:30)

6月~9月の毎週金曜日は20:00まで開館(最終入館は19:30)

休館日 毎月第4次曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日~1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等

印刷物版番号 J0416006

ogai
マト
文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum